# 序
# 鍼灸の世界的広がりを考える

形井秀一
筑波技術大学保健科学部

2013 年の第 8 回社会鍼灸学研究会から 1 年間が経過した。

この間、日本鍼灸界では、2013 年 10 月に第 1 回経絡経穴学研究会が開催され、経絡経穴研究が新たな一歩を踏み出した。また、11 月には、シドニーで、WFAS（世界鍼灸学会連合会）が開催され、2016 年に日本で WFAS の大会が開催されることが決まった。（ちなみに、2014 年は、米国ヒューストン、15 年はカナダのトロント、2017 年は韓国と北京である）。さらに、2014 年 5 月には、京都で第 5 回 ISO/TC249 の全体会議が開催された。

このように、短期間に、日本国内で鍼灸に関する世界的な動きが続くことは、戦後 70 年間でも余り多くないことだろう。これは、鍼灸が世界的な関係性の中に存在することになったことを如実に示しており、同時に、世界の鍼灸界が大きく動いていることを意味する。

1960 年代には既に経穴に関する国際会議が開かれていたが、その国際会議はアジアの国々の間で行われていたもので、限定的な「国際」であった。しかし、WFAS の加盟団体を見ると、現在は、世界 50 カ国以上が、鍼灸の学術団体を有し、鍼灸の学術活動を行っている。

これは、中国の、国を挙げての努力なくしてはなし得なかったことであり、現在の世界的な鍼灸の広がりを考えるとき、中国鍼灸がその中心となっていることも認めざるを得ない。

それでは、日本は、単に中国の後塵を拝することに甘んじるべきであるのかと言えば、もちろん、NO！である。日本と同様に中国から中医学を学んだ韓国が、今、韓医学を世界の医学にしたいと望んでいるように、日本が、日医学を世界に知ってもらい、日医学を世界の人々の健康に役立ててもらいたいと願うことは、至極、当然である。それだけ、日医学が現代の人々の抱える健康問題に役立つものであると考えるからである。

文化や文明の一分野が世界と関わり得る度合いは、その分野が属する文化や文明全体が世界と関わっている度合いと比例する。世界と関わるということは、その国の人や物がどれくらい世界と行き来しているかということである。もし比例していなければ、どこかに無理が生じ、うまく行かなくなるであろう。中医学の広がりは、現在の中国の経済的な勢い、その経済の具体的な裏付けである金や物の動き、そして、その動きと同時に中国文化を世界に広めようとする堅固な意欲に、裏打ちされている。和食が世界遺産になるには、過去 20～30 年間、世界に渡って和食を広め、スシを握り続けた先駆者達が居たからである。

息の長い活動が必要であろうことは分かっている。

だが、世界に出かけて、日本鍼や日本灸、日本指圧、日本あん摩を伝えている人は少なからず居る。その人達の力を活かす時期に来ているのではないだろうか。その人達は、日本文化と日本鍼灸あん摩を普及し、各国に根ざした活動をしているはずである。

鍼灸の世界的な広がりは、日本鍼灸の広がりでもあってもらいたい。そのためには、それ相応の努力が必要であろう。